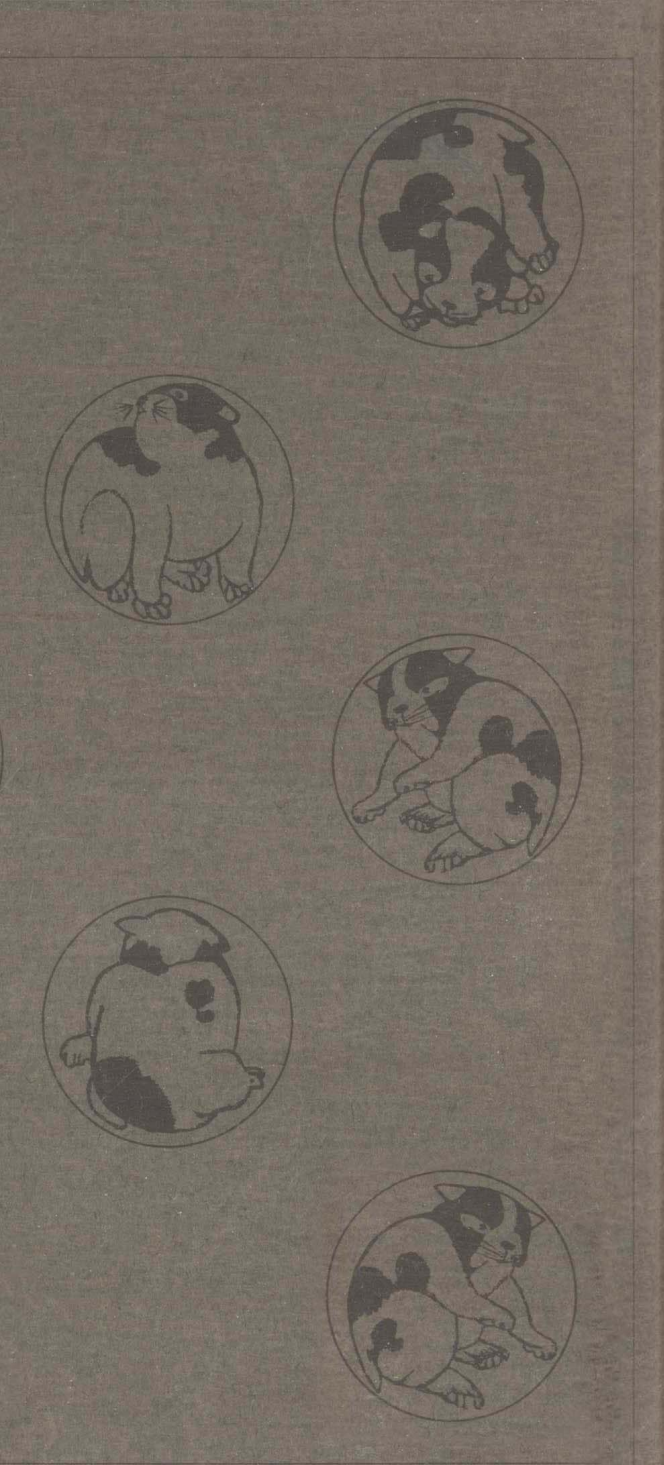

南総里見八犬伝

六

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店

南総里見八犬伝

六

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店

南総里見八犬伝 (六) (全一〇冊)
一九八五年四月一五日 第一刷発行©
定価二三〇〇円
校訂者 小池藤五郎
発行者 緑川亨
発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇
印刷・精興社 製本・文勇堂
落丁本・乱丁本はお取替いたします
Printed in Japan
ISBN 4-00-004316-1

解説

薄倖の瀧澤家――次男・三男は夭折し、残るは長男の興旨・四男の興春・五男の馬琴・長女の蘭・次女の菊、合せて五人のみである。興旨が松平家を去り流浪していた頃、彼は傭書筆耕で口を糊した。甲府勤番支配戸田忠諏に仕え、病母の看護を二十日以上許されなかった時、興旨は悄然禄を棄て、母と妹を伴って、九段坂の高井土佐守の長屋――興春の宿舎――へ移るのであった。兄弟五人が興春の陋屋内で母の看病をする窮状は、眼を覆わしむるものがあったろう。

天明五年四月に興春の長屋に移り、同年の六月二十七日母は歿し、その七七日の忌が果てた頃、興春の主君高井土佐守が卒し、興春もまた主家から解雇された。興春は水谷信濃守に仕えるようになったが、御長屋内に兄弟多数の同居はよくない故、八月には興旨らの四人は、本所林町の叔父の家に厄介になった。興旨は間もなく山口和泉守に仕え、ほっと胸を撫で下ろすのであった。

興春は始め入聟となり、家附の妻に侮られ、養家を去り、興旨に寄食して傭書筆耕をしていた。俳句を好み、「克己亭鶏忠」と号し、狂名は「縁原の近藤」と呼んだ。水谷信濃守に仕えて赤坂の邸の長屋に住み、傷寒に罹り、看護する者もなく、兄の興旨・弟の馬琴が駆け附けた時は、すでに絶命していた。馬琴が買って来た棺に納め、小石川の深光寺に葬った。天明六年の秋、享年二十二。

妹の蘭は十六歳で崎山伊摠治に嫁したが、翌年に離縁した。間もなく親類先の鈴木嘉伝次に嫁し、名を「秀」と改めた。妹の菊は十七歳で山口和泉守の臣田口久吾(三十五、六歳)に嫁した。興旨の妻の添は、山田平兵衛の異母妹、母あって父なき不幸の女性である。興旨との間の長男は流産、長女の清は痘瘡で歿した。

巣はなして子に鳴く鳥や仏法僧

は、愛児の死を悼む興旨の句である。次女の蔦も歿し、妻の添は再縁し、興旨の血統は絶えてしまった。秀の夫の鈴木嘉伝次は柳生但馬守に仕えたが罪により牢死し、その二子は行方不明になった。秀は文政の初年に水戸家の留守居同心山田吉兵衛の妻となった。田口久吾の妻の菊も不幸である。一女を産んだが死なれ、養子には背かれ、四十二歳の冬に夫に死別してしまった。『八犬伝』中の主要人物には、こうした瀧澤一家の数奇の運命が纏わり、立志伝中の典型的人物が多い。

馬琴の兄弟姉妹は、いずれも微賤微禄の用人階級の士人で、生活難に喘いで来たが、特に子孫については不運で、馬琴を除いては殆どすべて子孫は絶えている。馬琴は兄興旨の子孫が無いことを悲しみ、我が子をもって後継者たらしめる考えであった。一粒種の男児興継は鎮五郎と呼んだ。文化七年に侍医山本春院法印の門に入れ、瀧澤宗伯と号せしめた。文化元年八月、神田明神下に家を買い、二十一歳の宗伯を兄の世継とし、瀧澤家を再興せしめた。同三年の秋に松前志摩守章広から御抱医師として、宗伯に月俸を賜うようになった。馬琴は「祖先の余福」と言って喜んだ。

(昭和十四年四月)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡　例

一、校訂には『南総里見八犬伝』の初版本を用い、校正は毎回原本に拠って厳重に行った。

一、読みやすくするために、左の諸点に特色を持たせたほかは、全く原本通りにして置いた。

(1)　本文に段落を設け、詞には鉤(「)を施し、仮名の濁点・半濁点は適宜に補った。

(2)　冒頭の漢文の序の繋符(−)を除き、目録は仮名交りに改めて本文中の回号に一致させた。

(3)　本文中に和歌・詩文・その他が挿まれている場合には、それを抜出して別行とした。

(4)　原本の文章はすべて句点(。)で切ってあるが、それを読点(、)・句点(。)に分けて用いた。名詞を重ねた場合で、原文に句点がない時だけ、並列点(・)を附けて置いた。

(5)　原本中の文字・仮名づかいの甚だしい誤謬——例えば「城平等」を「城兵等」に、「聡察叡智」の「そうさつはいち」を「そうさつえいち」に訂正——は訂正して置いた。

(6)　原本の仮名づかいは「亡父」・「滅亡」、「亀篠」・「亀篠」等の如くに、同一の文字についてもしばしば不統一である。かかる点は、むしろ時代の仮名づかいと、作者自身の特徴とを知る上から、原本通りにした。ただし「人物一覧」には多く用いられている方を振って置いた。

（7）馬琴の特色ある文字使用法を保存するために、極力原本通りの漢字を用いた。ただし「也（なり）」・「歟（か）」その他を仮名書にした。「漁夫（ぎょふ）（リヤウシ）」の如き場合には左側の片仮名のみを削った。

〔編集付記〕

旧岩波文庫版『南総里見八犬伝』全十巻（小池藤五郎校訂、昭和十二～十六年刊）を改版するにあたって左の改変をくわえた。

一、旧岩波文庫版を底本とし、国立国会図書館蔵の初版本『南総里見八犬伝』（架蔵番号別三―一〇六―二）と対校して誤植などを訂した。

一、右国会図書館本により、旧岩波文庫版で省かれていた挿絵を余すところなく補った。

一、漢字は新字体を用いたが、仮名づかいは初版本どおりとした。

一、底本で使われている異体字のうち、逃・群・腰・胸に改めた。

一、読みやすさの便をはかって振り仮名の一部を省略したが、人名・地名などの固有名詞はこの限りではない。

一、底本の（　）は原本の割注を示しているが、今回これを〔　〕に改めた。原本の欄外注は「　」に収めた。

一、各輯の総目録は訓み下し文に改めたが、本文中の回号との異同は初版本のままとした。

（岩波文庫編集部）

話の筋（第六巻の分）

〔第九輯〕（巻之七より巻之十二下まで）

九歳の少年犬江親兵衛の働きの目覚しさ、忽ちに曲者らを捕えてしまった。そこへ荒芽山以来全く行方不明になっていた姥雪与四郎と妻の音音、嫁や孫までもぞろぞろと出て来て、伏姫神霊に救われた不思議の数々を義実に語った。親兵衛は主君の許しを得て与四郎を供とし、名馬青海波に鞭打ち、里見の大軍が包囲中の館山城へ乗り込み、奇計をもって敵将素藤を捕え、若君義通を救い出した。義成は親兵衛に館山城を守らせた。義成が稲村城へ凱旋の途中、滝田城に父の義実を訪い、戦勝の祝宴を張り、召された妙真は孫の親兵衛の手柄で特に面目をほどこした。

素藤の生命は義成と親兵衛の仁慈によってゆるされ、十文字の黥を額にして墨田河の西岸に追放された。河畔の小船の中に熟睡した素藤は、目覚めた時に見も知らぬ山中の庵室近くに自身がいるのに驚いた。これは妙椿が妖術で人不入の山へ素藤を連れて来たのであって、素藤は艶麗な妙椿と、この山で享楽の日を送るのであった。

浜路姫が何かの怨霊に悩まされるので、義成は不思議な行者の言葉に従い、親兵衛を館山城から呼び寄せて姫の病床を守護させ、また彼の持つ仁の字の玉を病室の下に埋めさせた。

妙椿は、妖術で姫と親兵衛とが不義をしたように義成に思わせ、遂に親兵衛を里見家から遠ざけた。親兵衛は乾す由もない濡衣を着たまま旅に出た。親兵衛は船で市河へ行こうとしていると、光明を発って飛び来った物が我が懐に入ったので驚いて取り出せば、それは仁の字の我が霊玉であった。姫の病気も親兵衛の無実の罪も、すべて妙椿の妖術の致すところであった。

恐るべき親兵衛がいなくなったので、妙椿は素藤と共にその残党を集め、一挙に館山城を陥れ、登桐良干を捕虜とした。里見義成は直ちに荒川清澄をして館山城を攻撃させたが、妙椿の術に一千五百の兵は悩まされ、浦安友勝は捕えられた。素藤方からの捕虜の交換に応じたところ、受け取ったのは藁人形であった。よんどころなく里見方では館山城を遠巻にしているのみであった。

里見家の恩に感じた南弥六らは、寄手の大将荒川清澄の贋首をもって素藤に近づき、これを刺そうとして妙椿のために殺害された。妙椿が浜路姫を奪い出した時に、伏姫神霊は姫を救い妙椿の胸を蹴った。胸を伏姫神霊に蹴られた後は妙椿の妖術は次第にその威力を減じた。浜路姫の言葉で、義成の疑心は一掃され、親兵衛を召かえすために蜑崎照文・姥雪与四郎の二人が発足した。

安房国を去った親兵衛は市河の亡き父母の家に依介夫婦を訪ね、父母の墓に詣でて追慕の涙にくれた。ついで行徳の古那屋の墓に詣で、更に江戸に入り、上野の原の茶店に憩い、主の老婆から犬坂毛野の復讐の大血戦や扇谷定正の室蟹目前と忠臣河鯉守如の自殺などを聞いた。そして今日しも守如の伜で無二の忠臣河鯉孝嗣が前面岡で処刑されると語られ、同情のあまり機会を狙

っていた。突然刑場へ厳しい行列で乗り附けたのは蟹目前の実母簸大刀自で、孝嗣を救い煙のように立ち去った。孝嗣の人物に感じた親兵衛は、偽って喧嘩をしかけた。孝嗣の白刃と親兵衛の鉄扇とは不忍の池畔で火花を散らした。

主要人物一覧（第六巻の分）

○信乃・荘介・現八・道節・小文吾・毛野・大角・親兵衛　八犬士。

里見義実　里見義成　義成は義実の嫡男で里見家の当主。義実は滝田城に住み、義成は稲村城を居城とした。

里見義通　次丸　義通は義成の長男。次丸は次男。

蟇田権頭素藤　もとは山賊。館山城主。妙椿の助けを得て里見義成としばしば戦った。

東峰萌三　小水門日鮪船貝六郎　義実に従って富山に登り、麻呂・安西等に襲われた。

安西出来介景次　義実が亡ぼした安西景連の一族。素藤に従い義実を富山に襲う。後に里見の臣となった。

麻呂復五郎重時　義実が亡ぼした麻呂信時の一族。素藤に従い義実を富山に襲う。後に里見の臣となった。

天津九三四郎員明　神余の旧臣。上甘理墨之介弘世を養育した。義実を富山に襲う。後、里見の恩恵に浴した。

上甘理墨之介弘世　神余光弘の妾腹の子。愚鈍でかつ病身であった。

荒磯南弥六　洲崎無垢三の外孫。里見家の恩に感じ、安西出来介と共に素藤を刺そうとして殺された。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

椿村の墜八　荒磯南弥六の子分。南弥六らと共に富山に義実を襲った。

姥雪与四郎（姨雪世四郎・猩平・花咲の翁）　音音（花咲の媼）　曳手　単節　与四郎は犬山道節の旧臣。音音はその妻。曳手・単節は亡き二人の伜の嫁。第三巻を見よ。

十条力二郎　十条尺八郎　姥雪与四郎の孫。力二郎は亡き力二郎と曳手、尺八郎は亡き尺八郎と単節の間に生れた。

苫屋八郎景能　里見の臣。与四郎と共に親兵衛の若党に身をやつし、館山城に乗り込んで義通を救い出した。

礪時願八業当　もとは山賊。素藤に招かれてその頭人となった。

平田張盆作与冬　もとは小鞠谷如満の臣。素藤に従って一方の大将となった。

奥利本膳盛衡　浅木碗九郎嘉俱　小森但一郎高宗　浦安牛助友勝　田税戸賀九郎逸時　堀内雑魚太郎貞住　いずれも里見の家臣。館山城を田税・苫屋らと守り、素藤に捕えられ、臣下になれと強要されたが屈しなかった。

登桐山八郎良干

千代丸図書助豊俊　真里谷信昭　武田信隆　千代丸は榎本、真里谷は椎津、武田は庁南の城主。素藤に味方して里見の軍と戦った。

妙椿　妖術をもって素藤を助けた。人不入の山に素藤と同棲したこともある。素藤はこれを軍師とあがめ、天助尼公と尊称した。

奥利狼之介出高　素藤の臣。奥利本膳の子。血気にはやり、荒川清澄の軍を夜襲して捕えられた。

荒川兵庫助清澄　杉倉氏元・堀内貞行・東辰相とともに、里見四家老の一人。第二回の館山城攻撃

の大将。

田税力助逸友　小森但一郎・浦安牛助らとともに、里見義成側近の三勇士。荒川清澄の手に属して館山城を攻めた。

仙駝（仙駄）麻嘉六　素藤の臣。館山城内で南弥六に討たれた。

野幕（名幕）沙雁太　扇谷定正の臣河鯉権佐守如の子。第五巻を見よ。

河鯉佐太郎孝嗣　越後国の長尾景春の母。扇谷定正の室蟹目前の実母。第四巻を見よ。

箙大刀自

目　次

解　説
凡例・編集付記
話の筋（第六巻の分）
主要人物一覧（第六巻の分）

南総里見八犬伝（六）

八犬伝第九輯中帙附言
南総里見八犬伝　第九輯中套総目録
八犬伝第九輯序

第九輯巻之七

第百四回　老侯に謁して親兵衛神助を訟ふ　奇特に驚て刺客等各〻帰順す……二五

第百五回　名山霊有り枯樹復花さく　逃客路無し老俠俘を献る……四三

第九輯巻之八

第百六回　青海波を牽して景能稲村より来たる　黒闇夜を犯して曼讃信館山に赴く……六二

第百七回　犬江親兵衛活ながら素藤を捉ふ　里見御曹司優に陣営に還る……九〇

第九輯巻之九

第百八回　義成仁を旨として刑を寛くす　貞行主に謁して克を奏す……一〇八

第百九回　八百尼山居に敗将を誘引ふ　浜路姫病牀に冤鬼に魘はる……一二九

第九輯巻之十

第百十回　反間の術妙椿犬江を遠ざく　妖書の孽仁妙真に辞別す……一五三

第百十一回　妖尼庭に衆兇を聚ふ　素藤夜旧城を襲ふ……一七七

第九輯巻之十一

第百十二回　君命を稟て清澄再叛の賊を伐つ　機変を旋して素藤牛狼の囚を易ゆ……二〇〇

第百十三回　三臣の瓶里見侯を醒す　一級の首南弥六を愆つ……二三六

第九輯巻之十二上

第百十四回　義侠元を瘞て郭号を遺す　神霊魔を懲して処女を全す……二五二

第九輯巻之十二下

第百十五回　前面岡に大刀自孝嗣を救ふ　不忍池に親兵衛河鯉を釣る……二七八

南総里見八犬伝

(六)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com